

羽黒山周辺と玉島湊

はぐろさんえんざき
羽黒山縁起

標高わずか十
メートル余、
山麓の周囲約

三百メートル程の小じんまりと
した山。

かつては「阿弥陀山」とも呼
ばれ、矢出町の北の海中に浮ぶ
一小島であった。

江戸時代の初め万治二年(一六
五九)、備中松山藩主水谷伊勢
守勝隆が玉島新田の開発を行い、
その鎮護と発展を祈って、前任
地常陸国下館より「羽黒宮」を
勧請して祀った。これによって
その後「羽黒山」と呼ぶように
なったといわれている。

引続いて、寛文五年(一六六五)

水谷左京亮勝宗が社殿を改築し
て、松山藩水谷氏の祈願所とし
た。

羽黒神社の社伝に曰く

謹ミテ社記ヲ按スルニ御祭神ハ

玉依姫命 素戔嗚命 大國主

命 事代主命ノ四神ニ在シテ

万治元年 松山藩主水谷勝隆公

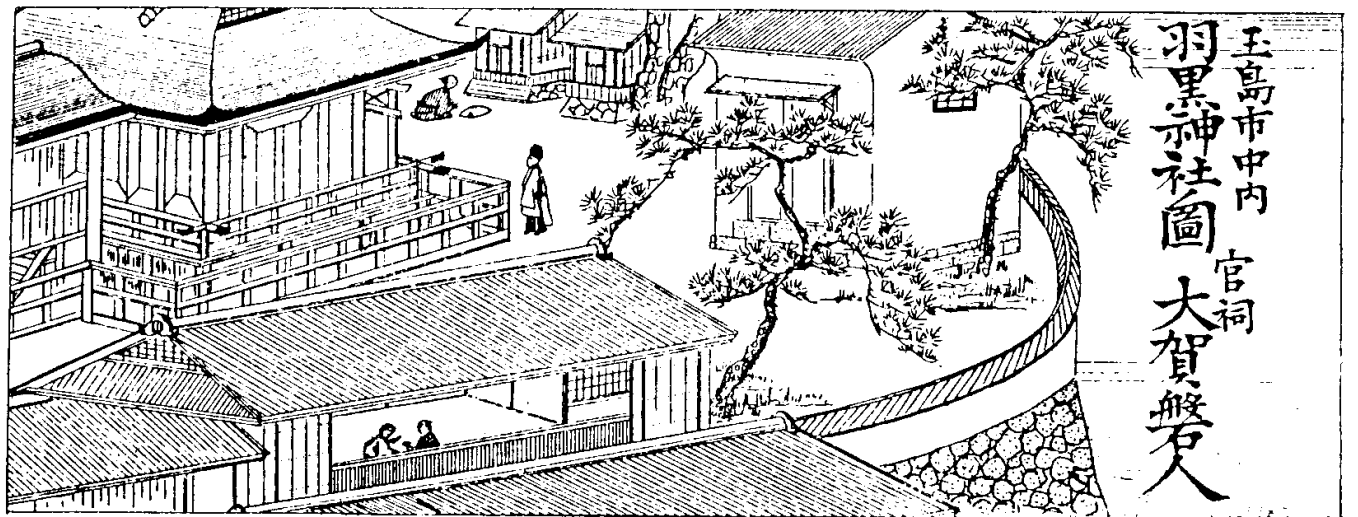
千拓ニ方リ 出羽国羽黒権現ヲ

勧請、社殿ヲ祈願セシヨリ開拓

後 移住者ニ繁ク 遂ニ内海ノ要

津 小浪華ノ称アルニ至ル(後畧)

〔昭和四九年十月羽黒神社奉賛会選書より抜す〕



玉島市中内 官祠
羽黒神社圖 大賀盤人

羽黒山の境内敷地は一反五畝
一步(約一三メートル)あり、祭日
は十月十五日と定められていた
という。

また同じ寛文五年に勝宗は、
仙海和尚を開祖として清滝寺を
建立し、羽黒神社と合せ、その
社寺領として九石余を与えた。
水谷家断絶後は、松山藩主と
なつた安藤家、石川家、板倉家
と引続いて崇敬を受けて、維持
されてきた。

創建当時の羽黒山には、東西
南北の四方に参道があつたとい
われているが、いつのころか北
口は閉鎖されたようである。今
でも人家の間から、それらしい

石段が見える。

維新後、神仏分離令によつて
明治三年(一八七〇)、羽黒神社と
改称し、清滝寺と分離してそれ
ぞれ独立して今日に至つてゐる。
また大正五年(一九一六)には、
町内各所に散在してゐた祠と丸
山の住吉神社を合祀して、現在
の姿になつたともいわれている。

清滝寺伝に曰く

……前畧……

また、阿弥陀山というのは、

承和五年(八三八)慈覚大師
が入唐の際、この地に立ち寄り



阿弥陀像を刻み堂中に安置したことに由来するといふ。

柏島と阿賀崎の由来

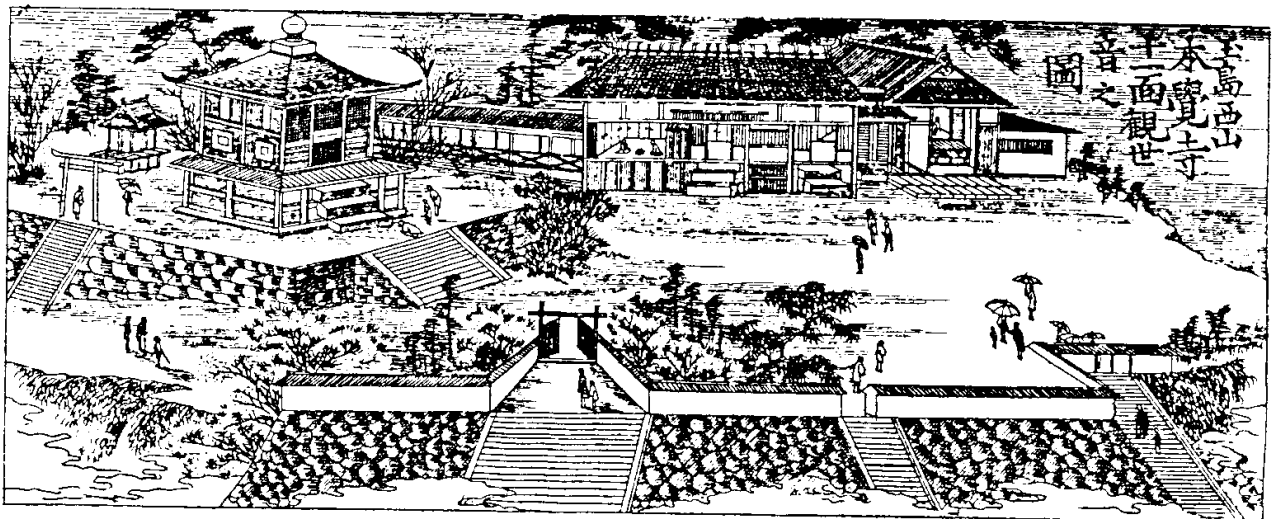
今は昔、柏島村
西山の本覚寺へ
現秋葉町と西山

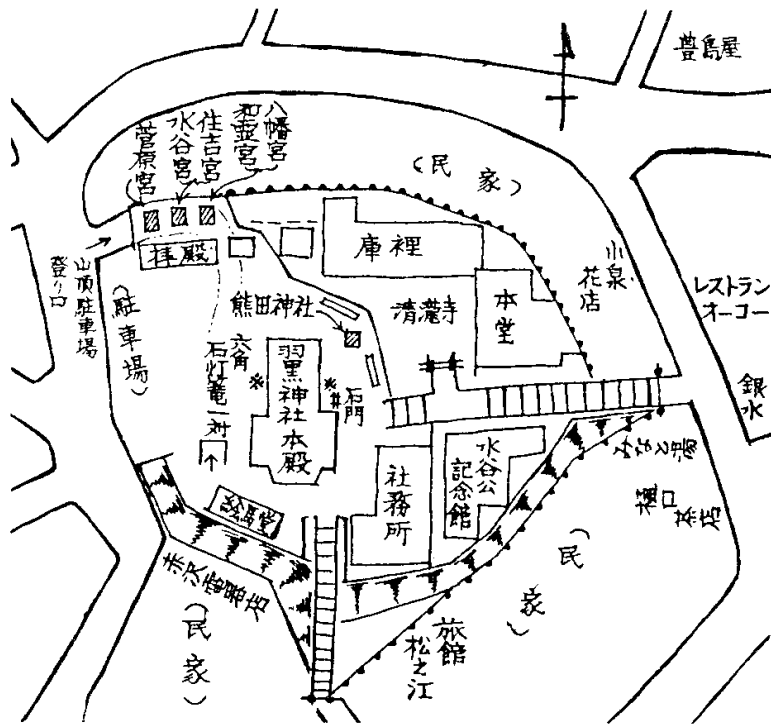
この境界付近にあったといふに、一本の「柏」の霊木があつたといふ。これによつて「柏島」の地名が付いたと伝えている。

九世紀の初め、入唐の際この沖に泊つた慈覚大師が枯れた柏の霊木を刻んで、十一面観音像を造り祀つたことから、本覚寺の歴史が始まる。しかし、十二世紀末の源平水島合戦以降、荒廢がはげしく廢寺となつていたのを、元祿五年（一六九三）水谷出羽守勝美によつて再建され、十一面観音を本尊として祀り、近郷近在の崇敬厚く隆盛した。

この時、かつて慈覚大師が十一面観音に供え

此山ニ木ト柏ノ霊木アリ蓋シ
神仙ノ舍レル所口上ニ瑞雲拥
引キ下モニ靈草生ガ人之レヲ
柏ノ神社ト称シ水旱疾疫ニハ
必ズ禱ル禱レバ必ズ感アリ承知
年中其木枯レタレバ人之ヲ憂フ
時ニ慈覚大師入唐ノ砌リ船此
沖ニ泊ス海上光ヲ放テ飛テモ
ノアリ大師在シミテ其光ヲ尋
テ此山ニ上ルニ十一面観音其
枯木ノ中ニ隠レタリ因テ其木
ヲ以テ此十一面ノ像ヲ造リ其
徳ヲ不朽ニ傳ヘント欲ス是ニ
於テ人大ニ喜コビ復々之ヲ崇
敬スルコト初ノ如シ然ルニ源
平兵亂已来其祭祀怠リテ殆
ンド廢セントセシナリ元祿ノ
頃口主水谷出羽守此寺ヲ建
立シテ其ノ本尊トナシ再ビソ
ノ祭事ヲ興復ス其時大師阿伽
ヲ汲シ跡ヲ阿伽等ト称シ其地
ヲ柏島ト称スルヲ皆々此縁ニ因テ也

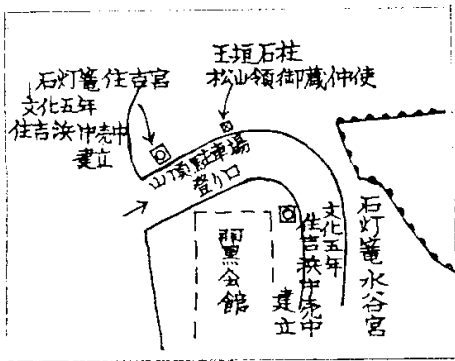




羽黒山 山頂及び周辺略図
(平成元年6月 渡辺作図)

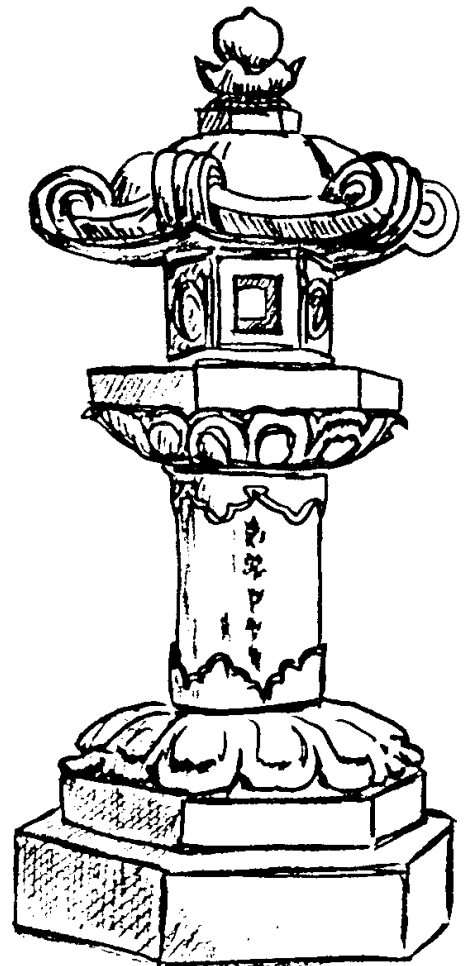
るための水へ「阿伽」というしを汲んだという
跡を「阿伽崎」と称するようになり、後に「阿
賀崎」と呼ぶようになって、今日の地名になっ
たと伝えていいる。

本覚寺は今、その姿を消してしまっている。



羽黒神社西参道略図
(平成元年6月 渡辺作図)

六角石灯籠(二対) 松山藩主水谷出羽守勝美が元禄
五年に寄進した、花崗岩製の、高さ約三米、筒蓋系豪
快な作り灯籠。羽黒神社本殿の左右両脇に設置
されている。(倉敷市重要文化財指定)



玉島湊古図

江戸時代
末の文政年
間に作成さ

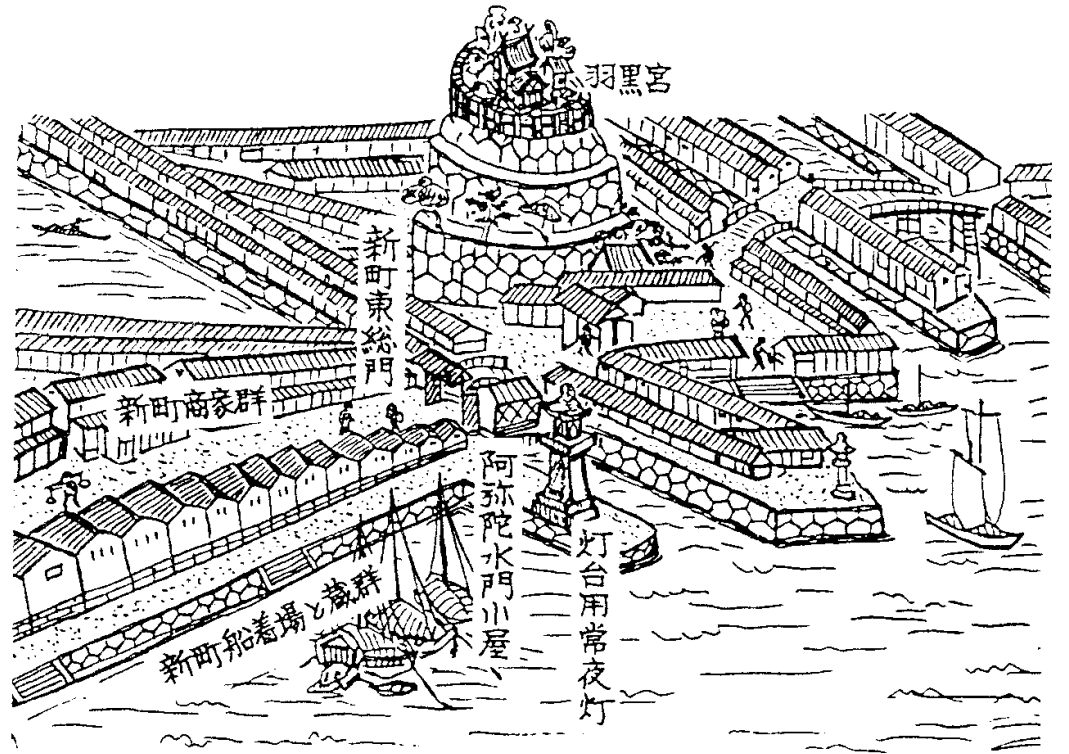
れたといわれる「備中州玉嶋湊
圓通寺築山図」(彩色木版画)
によると羽黒宮を中心とする
玉島湊を描き出した図がある。

先ず目につくのは、羽黒山が
三段の石垣によつて築き上げら
れ、その上に玉垣を巡らして羽
黒宮が鎮座している様子が描か
れていることである。

羽黒山を中心に港町が発達し
たといわれているが、図はその
ことを物語っているように思う。

三段の石垣は大正末頃まで健在であつたと伝
えられているが、その後は人家の密集にとまな
つて次第にくずされてしまつたという。

また、西参道入口付近には大井戸もあつたと
伝えているが、これも今では姿を消している。



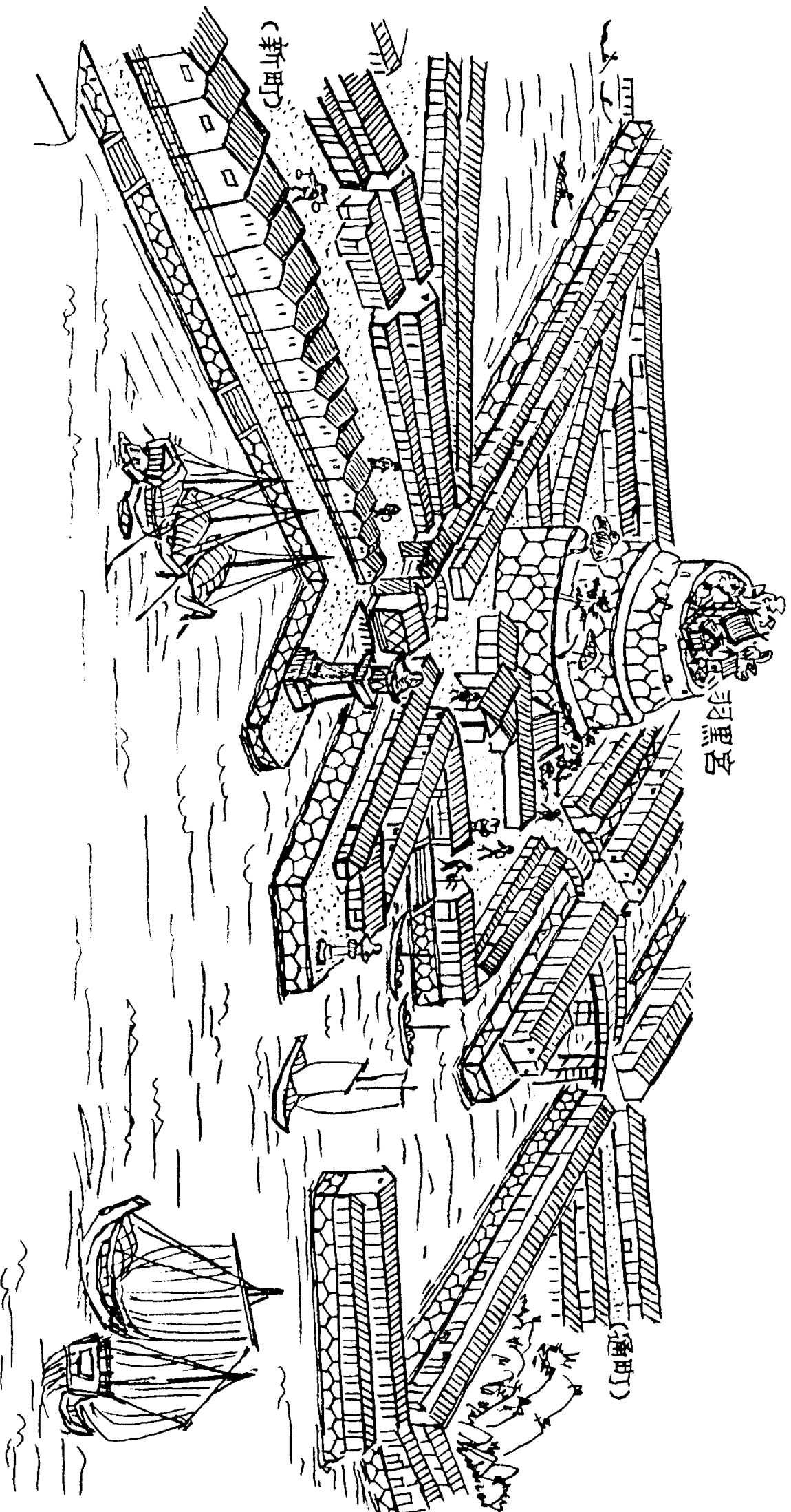
さらに阿弥陀水門小屋らし
い建物が、大きな石灯籠の頭
部当りの水路上に描かれてい
るのが見えるが、これも大正
末頃まで、金光堂新町店付
に健在で排水水門として活躍
していたが、その後水門の統
合改廃にもなつて姿を消し、
羽黒山の西下の街の様子も今
では大きく変わつてしまつた。

続いて図の中央から左手前
にかけては、北前船の入港で
にぎわつた新町土手も、港に
面した船着場には大小さまざま
な蔵がずらりと軒を並べ、
通りをへだてた北側には問屋などの商家が軒を
連ねている様子が描かれている。

北前船が一度に何十艘も入港すると問屋の蔵
はいっぱいになり、あふれた魚肥やその他の荷
は、わずかに人の通路だけを残して道路一杯に

玉島太古図の横写図

〔文政年間（幕末1818～1829）
作成といわれる彩色版画より
横写複製 H3.3.23 渡辺〕



山のように高く積み上げられたという。

翁の話によると明治時代にも同様であつたらしく、子供のころ道路上に積み上げられた鯨の山を駆け登りかけ降りて遊んでは、店の人に叱られたという。

このために

新町通りの東西の出入口には総門が設けられ夜になる



と門を閉め、夜廻りの番人が大鼓を打って時を告げて歩き、みだりに人の通行を許さなかつたともいわれている。

図の中では羽黒山の下方に東の総門らしい建物が見える。

また、灯台らしき大きな石灯籠が見えるが、現在川崎みなと公園内に設置されている二基の石灯籠のうち、『金毘羅大権現永代常夜灯』

「明和五年（一七六八）世話人小平治」の刻文のある常夜灯が港出入りの船のための目印として、

当時活躍していたようである。

公園内の説明板には「当初港町の新庄屋付近に設置された」といつているが、図中の大きな石灯籠がそれではないかと推測している。

図ではさらに羽黒山の右へ通町へ通ずる「柳橋」から「中島・矢出」の街並みや「矢出山」と思われるものも見え、港には北前船のいわゆる千石船や高瀬舟などの姿が見える。

北前船が来る

「夏肥え」を積んだ北前船は六く七月ごろに、「秋肥え」を積んだ北

前船は九く十月ごろにやってくる。

馬関（下関）から早飛脚で「北前船が来る」という知らせが伝わると、港はにわかには活気づく。問屋は蔵をあけて荷積み用の意をはじめ、金策にとび廻る。

仲仕頭は仲仕集めに懸命になる。

港町の遊女たちもまた髪結屋にかけこんでみ

がきをかけ、取っておきの晴着の手入れに忙がしくなる。

いよいよ北前船が入ると蔵の段取りから仲仕の幹旋、天候の様子、相場の取り決めと積荷のさばき等々で、少なくとも数日を必要としたという。

この間、船乗りたちは帆前の修理から船の点検整備に忙がしく、港の「船具屋」もまた忙がしくなる。

とにもかくにも一隻の船に少なくとも十数名の船乗りがおり、それが一度に二十隻とか、さらには三十隻以上とも入港するとなると、港は巨大な船と三百から五百人余もの船乗りでいっぱいとなり、熱気であふれることとなる。

風呂屋をはじめとして、飲み屋小料理屋、遊女屋はもちろんで、呉服屋、小間物屋、下駄屋などが一斉ににぎわったといわれる。

………なんで海の男に呉服屋、小間物屋、下駄屋がにぎわうのかて………やばな、どうもんじやないて………

港の女たちは精一杯愛まようを振りまき、海の男たちは女の気を引くために彼女のほしがるくし、こづかい、かんぶしとか羽織や浴方の一枚でも、また江戸時代では庶民にとってはぜいたくであった下駄でも一足買って与えることにもなるうがものを………

問屋では船頭が風呂屋へ入浴するときには湯女や下女をさしむけて背巾を流させたともいわれる。

一方、港にあふれた船乗りたちは、二ヶ月に余る海上生活に板子一枚海の底と、帆に運命を托してやってきた一年の総決算、色と欲との修羅と化す。

海の男たちの熱気を受けとめやさしくときはぐしたのが港の女たちであつたが、その大半ははかない一夜妻でもあつた。

売られ売られて風の如くに来たり、風の如くに消えていった悲話話は語り継がれることもなく消滅している。

かつての色街のあちこちに残る地藏像が、わすかに昔日の哀史を物語っているだけである。

余話(1) 御手洗港と「おちよろ舟」

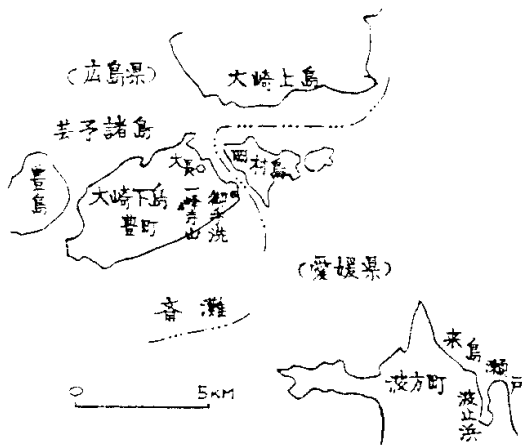
広島県大崎下島の御手洗港は古くから下関・鞆・兵庫・大坂と並ぶ商港として、瀬戸内海を往き来する千石船の中継港であり、また海路を行く西国大名の参勤交代の停泊地としても繁盛した港町である。

大川さまざまな船が入港するごとに「おちよろさん」たちが小舟に乗って漕ぎ寄せる。

交渉成立で一夜妻となり、水夫たちの食事の世話から洗濯・つくろい物までする彼女たちには、やがて出帆と共に悲しい別れが待っている。

「御手洗港を素通る船は、親子乗りかよ、金無しか」

哀れな港町の遊女の話はいづくも同じ。しかし「おちよろさん」たちの哀話は一汐胸にしみるものがあるという。



余話(2) 朝鮮使節と牛窓港

三代將軍家光の寛永十三年から十一代將軍家斉の文化十四年までの約二百年間、將軍の代替りごとに朝鮮から通信使が派遣された。

朝鮮からは正副使・從事官の三使以下約五百名、先導警護役の対馬の宗氏一行を加えると約二千名もの大集団が、対馬から江戸までを約半年の歳月をかけて往復した。

この間の輸送と接待役が沿道の諸大名に命ぜられ、岡山藩では牛窓港が宿泊接待地に当てられた。

このため牛窓周辺から千艘に近い船と加子として三千七百余人もの漁民が徴発動員された。

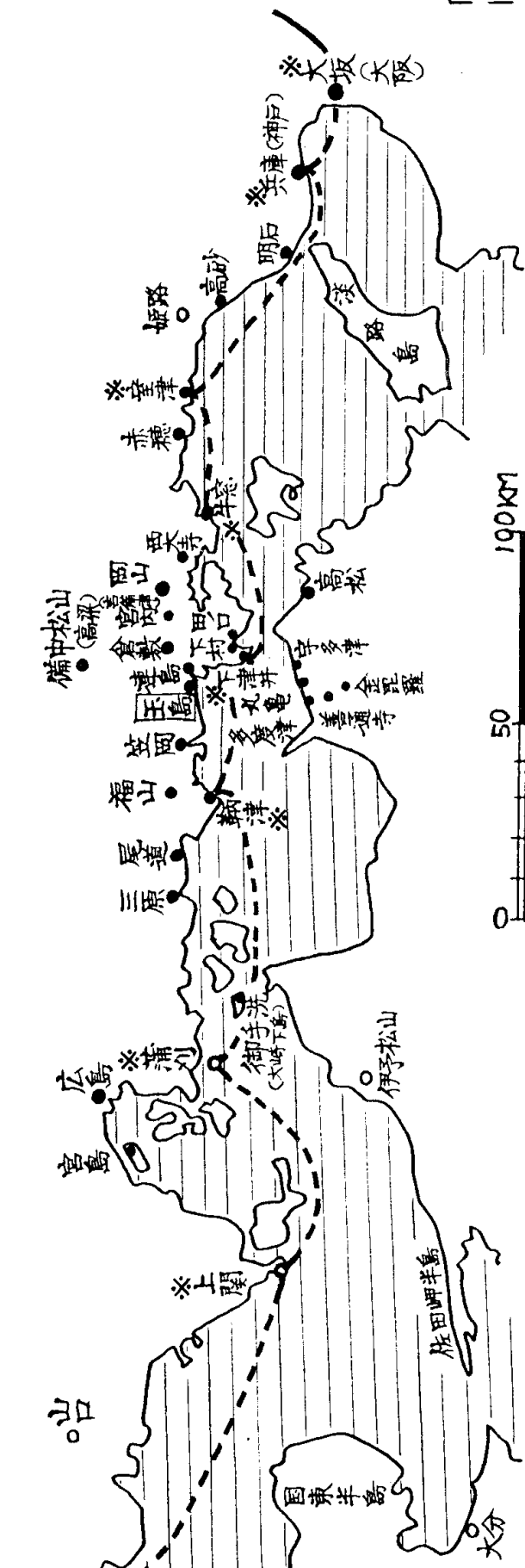
また、水や食料などの物資が大量に用意され供給したといふが、米だけでも一日に八石三斗余、酒が二石七斗余、刻みたばこが七貫余など、その他味噌・醬油から野菜・果物まで多種多様のものであったらしい。

さらには宿舎として、三使が本蓮寺に、その他は約二百軒もの町屋が割当てられた。なかでも通信使の宿舎となった約五十軒の町屋では、通信使の帰国までの数ヶ月間は家人といえども我が家への立ち入り一切禁止という大々な不便を強いられたという。

朝鮮通信使行程路

●●● 航路 — 陸路

* 寄港地 (休憩及宿泊地)



玉嶋湊より (一里約四百六十)

- | | |
|-----------|------------|
| 建島 | 一里半 |
| 倉敷 | 三里 |
| 下津井 | 五里 |
| 下村 | 五里 |
| 田口 | 六里 |
| 宮内 | 六里 |
| 岡山 | 七里 |
| 松山 | 八里 |
| 西大寺 | 十里 |
| 牛窓 | 十五里 |
| 赤穂 | 廿里 (二十里) |
| 鞆津 | 廿五里 (二十五里) |
| 高砂 | 三十里 |
| 明石 | 廿五里 (三十五里) |
| 兵庫 | 四十里 |
| 大坂 | 五十里 |
| 出岡 | 四里 |
| 福山 | 七里 |
| 鞆津 | 十里 |
| 尾道 | 十五里 |
| 三原 | 十八里 |
| 三夕子 (御手洗) | 廿五里 |
| 廣島 | 廿八里 |
| 宮島 | 四十三里 |
| 下関 | 百里 |

- | | |
|----------|-----|
| 讃州海上 | |
| 丸亀 | 十里 |
| 宇多津 | 十里 |
| 高松 | 十八里 |
| 多津 (多度津) | 十里 |
| 善通寺 | 十三里 |
| 金毘羅 | 十三里 |

備中州玉嶋湊
國之通寺樂山岡
文政年間版画より
(著末二六六元)